
セイシュン？

赤城涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイシュン？

【Nコード】

N4838N

【作者名】

赤城涼

【あらすじ】

とある少年がいました。

少年はこれから歩むだろう青春について悩んでいました。

さてさて、彼はどんな青春を選ぶのでしょうか。

彼の青春とは一体何なのでしょう。

悩み進む青春系小説。

Q:「青春って何ですか？」 A:「分かりません。」

「青春ってそんなに大事なもの？」と彼女は言う。

その言葉は今の俺にとってどんな罵倒よりも重い一言だった。

言葉に圧倒された心を覗くかのように俺の顔を見つめる彼女の笑みは、大変卑怯なものだった。俺は思わず顔を逸らした。女子にみつめられるのに慣れているわけもないので、顔を逸らすのも仕方がないことだろう。というか見つめられること自体が初めてじゃないか？

蝉は忙しく鳴いている。うるさい蝉は好きじゃない。うるさくなければいいのかというのもそれもまた微妙な話で、そもそも虫は好きじゃないし、うるさくない蝉など聞いたこともない。とにかくまあ、蝉のせいで夏の暑さはより一層引き立っているように感じられた。

夏休みの特有の気だるさにやられてしまいそうだ。

そんな真夏の真昼間だというのに、俺と彼女は外にいた。木陰のお陰で直射日光は免れているものの、それでも蒸し暑さだけは体に嫌らしく纏わりついてくる。夏という季節をあまり好きになれない。バイトが夕方からで本当に良かった。

暑いだけでも頭が働かないというのに、彼女がそんな言葉を投げかけてきたものだから俺の頭はオーバーヒート。今にも処理落ちしてしまいそうだ。

彼女はそんな俺を知る由もなく、会話は続いていく。

「どうしてそこまで青春にこだわるわけ？ 別にいいじゃない、普通に会社員でも。日本の社会人のほとんどは会社に通勤して働いてるんだよ」

「高校生活が充実してるお前に言われたくはない。俺は、おそらく現状を変えたいんだよ。それに、それだと普通過ぎてつまらないだろ」

「面白さを求めたところで限界があると思わない？」

非常に現実味のある言葉だ。正論のように聞こえる。実際正答なのかもしれない。彼女は俺よりも遥かに現実主義者なのだろう。そして対する俺は理想主義者なのかもしれない。

そんな理想主義な俺は青春を謳歌しようと日々努力を重ねているというのに、その何がいけないというのだろうか。そりゃ彼女から見たらバカらしいことなのかもしれないが、僕はどうしても素晴らしい青春を送ってみたいのだ。その何がいけないというのだ。

「なあ」

「うん？」

「俺って何すればいいと思う？」

「とりあえず勉強すれば？ 高校生なんだし」
相談相手を間違えたような気がする。

「そういうこと聞いてないんだけどなー」

「私に聞かれたって分かるわけじゃないでしょ。あなたの問題なんだから」

「ごもつともだ。」

隣で彼女は菓子パンを食べてながら、お茶を飲んでいる。俺はすっかり温くなってしまったスポーツドリンクを飲んでいた。なんともいえない生温さが喉を通過していく。染み渡っていく感じがまったくしない。

彼女は俺に向けて言った。

「あなたは、やりたいことないの？」

「青春したいね」

「具体的に言え」

具体的に言えと言われても、具体的に思い浮かばなかった。いや、一つだけ浮かんだのだが、それは今はやめておくことにしようじゃないか。

「友達はあるんでしょう？」

「一人だけいる。一応仲の良い奴。だけど、夏休み入ってから毎

日可愛い彼女とイチャイチャしてるらしいからな。さすがに俺がそこに入るわけにはいかないだろ」

「リア充なわけね。羨ましいこと」

全然羨ましいようには聞こえない棒読みの声。

俺も適当に答えることにした。

「まったくだ」

実は羨ましかったりするなんて、絶対に言わない。

本当に青春してるよな、あいつ。

隣の彼女も、友人の彼女と引けをとらないくらい美人だ。可愛い。小顔で目がくつきりしていて、綺麗なロングの黒髪をしている。個人的には彼女のほうが好きだ。

「時間大丈夫なのか？」

とりあえず時間の心配を試してみた。

「まだあと十分あるから大丈夫」

と、彼女は携帯で時間を確認して言った。

十分か。

短いな。

○

俺は先ほどから悩んでいる。

悩みが解消されないまま、俺の住んでいる町の名前が聞こえた。

俺はスイッチを押した。「次停まります」とバスが言う。

俺は自分のふくらはぎの上に広げていた文庫本をカバンの中に入れると、すぐにバスから降りられるように定期券を用意した。しかも面に見える運転手に定期券を見せる。プシューというドアの開閉音と共にエンジン音は高鳴り、バスは去っていった。

この一連の動作、昨日も同じような感じだった気がする。昨日も―― 一昨日は日曜日だったからバスには乗ってないけど―― 先週の金曜日も。まるで音楽プレイヤーのリピートのように同じ

動作の繰り返しをしている。正直飽きてきた。今度は定期を見せないでダッシュで逃げてみようか。いや、それでは犯罪者ではないか。

意外性のある行動をたまに取ってみたいという欲求はあるものの、実際に行動に移すことができない自分。それを意気地無しと表現されたら、確かに自分は意気地無しなのかもしれないと思えてしまうだろう。この臆病者め。

そもそも俺は自分のことを昔から判断力の無い人間だということを分かっている。誰かにくつついて、その人の選択した道についていく。たとえその道が失敗だとしても同じく失敗した仲間がいるというある意味安心感を得られるからだ。

高校生になって適当に過ごしていたら気が付かないうちに一年という月日が経過していた。その一年で俺は何をしてきたのだろう。思いつくものが何も無い。ということは何もやってないということになる。俺は自分の不甲斐無さに絶望した。

何でこんなことを今考えているのかというと、もうすぐで高校二年の夏休みだからである。

大変暑い日々が続いてる。それでいて湿気が多くジメジメしているため、身体は段々と重くなっておくように思えた。そのだるさに加えて、身体を這う汗のせいでYシャツは濡れていた。張り付くYシャツや濡れた靴下ほど不愉快なものはない。いや、そこまで大げさじゃないけど。

今日の授業中、蝉の忙しない声を聞きながら、夏について連想していた。

夏といえば、夏休み。

夏休みといえば、夏祭り。

夏祭りといえば、花火大会。

夏祭りといえば、盆踊り。

あとは海とか、プールとか……。

連想するうちにある一つのことに気付いてしまった。

どれも僕に無縁じゃね？

大変仲のいい友人が一人いる。ただ友人は俺とは違い、高校入学のころから彼女持ちである。一度紹介されたことがあったが大変可愛らしかった。そのため俺は近年そういうイベントには行かなかった。一人で行ったところで周りにはカップルの群れ。それを嫌でも見ることになり、ますます悲しくなるだけだ。というか考えるだけで涙が出てくる。

そういえばこんなことを中学三年のときも考えたような気がする。これはデジャブというものだろうか。いや、確かに俺は同じようなことを考えた。高校では同じ過ちを繰り返さないぞと決心したことも今思い出した。

判断力が無い、実行力が無いという駄目高校生は坂道を歩きながら絶望感に駆られていた。

そもそもこうなったのは誰のせいだ！ 責任者出てこいよ！
間違いない俺自身の責任である。

あのとき「明日頑張ろう」とか、「面倒だから部活入るのやめよう」とか思ってしまった自分がバカだったのだ。バカの阿呆だったのだ。

だが幸い俺はまだ高校二年生である。まだ七月初め。そう、まだ高校生活は約二年間も残っている。高校三年生になったら進路に向けて勉強に励むことになるが、この一年間でより良い人間関係を構築することができれば三年生になってもその人間関係だけで学校生活を充実させることができるはず。

そう、今年が勝負の一年だ。

勝負の夏。

今年を逃したら、身に何も残らない学生時代になってしまう。

判断力が無い、実行力が無いとかそんなこと言っている場合ではない。

やらなくてはいけないのだ。

俺は五時近くだというのに鮮明に見える白い月に拳を掲げ、決意するのだった。



青春とは何かを考えてみる。

高校生だからおそらくその時代の真っ只中なのだろう。ある人は「大学生くらいまでが青春時代だろ」と言い、またある人は「俺の青春時代は俺が決める!」と言う。ちなみに前者が俺で、後者は友人。さすが青春を謳歌しているだけのことはある。俺には考えもつかない言葉だ。

青春時代に失敗するということは、その後の人生の失敗を意味すると考えている。今野球選手になりたいと思っても無駄なのと同じである。野球選手というのは、野球経験も無い人間が高校生から目指せるような職業ではない。特徴ある職業というのは、技術や知識が必要不可欠であり、そういった技術や知識は学生時代から学ぶべきである。

このままの生活を続ければ、普通に会社員になって、普通に老後を送ることになるだろう。それか、墮落した毎日が続けて、仕舞いに働かない大人になってしまうかもしれない。後者よりも前者のほうが百倍マシだが、前者は面白さの欠片も無い。たった一度の人生、そんな一生で終わらせたくない。

とりあえず、やるべきことを箇条書きすることにした。

家に帰った俺は、ベッドに寝転がりながら、部屋の中を見渡した。本棚には、マンガとライトノベルばかりを置いてある。ゲーム専用テレビの前には家庭用ゲーム機が二台置いてあり、電源コードやテレビにゲーム画面を出力するためのあの三色端子が絡まっている。解く気にもなれない。勉強机の上。きちんと整理されているように見えるけど、あまり勉強をしないだけ。

気付かないうちに娯楽ばかりの部屋になってしまっていた。これは現代っ子の性のようなものだろうか。それともこんな悲惨な状況になっている高校生は俺だけなのだろうか。ここ数年友達の家に行ったことがないから基準が分からない。

まず友達が少ない。そう、俺には友達が少ないのだ。それを俺は改善すべきだ。

ゆっくりと起き上がり、使われる機会が少ない勉強机と対をなす椅子に腰を下ろした。ぐるっと一回転する。カバンの中のクリアファイルから紙を一枚取り出すと、右手にシャープペンシルを構える。ラインの間に『1・友達を作る』と書いた。

友達が少ない奴に良い人間関係なんて築けるはずがないのだ。早急に改善すべきである。

だが、この項目にはいくつかの問題がある。それは運悪くも、もうすぐ夏休みだということだ。あと一ヶ月未満でつい先日まで嬉しくてたまらなかったはずの夏休みに突入してしまう。今から少しずつ友好関係を築いたとしても、夏休みという長期休暇によってそれはどんどんと朽ちていき、海の藻屑と化してしまうだろう。

続きに『夏休み後』と付け足した。

部屋の中を見渡して初めて、俺には趣味と呼べるものがないことに気付いた。

趣味というのは結構重要なものだと思っっている。趣味から将来何がやりたいのかを見いだす人も多いらしい。にも関わらず、何故趣味を作らなかったのかというと、興味を持てるものがなかったという理由に尽きる。以前、ライトノベルを読んでいたときに「これなら自分にも書けるんじゃないか？」と思って小説を書いていた時期もあったが、自分の才能の無さを再確認しただけだった。

たがもう興味が持てないとか、面倒だ、などと言っている場合ではない。

下の行に『2・趣味を持つ』と書いた。

ただ、これは友達を作るよりも難しくなる可能性がある。要検討

するべきだろう。

あとバイトをするのもいいかもしれない。もしかしたらバイト仲間というのが作れるかもしれない。それに仕事をするということを学ぶのは将来のためになるはずだ。

『3. バイトをする』という項目を付け足した。

これで項目は三つになった。これらのことをこれからは「青春謳歌の条件」と呼ぶことにしよう。

これから俺はこの三つに挑戦していくことになる。全てを果たすことはさすがに難しいだろう。まずはこの中から一つ選んで実践してみることしよう。どれにするかは少し考える時間を置こう。

椅子から立ち上がると、再びベッドへとダイブ。

引き続き、青春謳歌作戦について考えていると、まだ上げていない一つの項目を思いついた。何故まだそれが上がっていないかったのだろうかと思議なくらいだ。それは確かに青春には欠かせないものであり、青春だからこそのものである。まさに究極の青春と言えよう。それを選択したら、おそらく俺はそれだけに挑戦し続けると思われる。

だが、俺はその項目を紙に書く気にはなれなかった。

あまりにも一番難易度が高すぎる。不可能近いことだ。もしかしたらと考えるのも阿呆らしい。だけど、そうなたらいいなという気持ちも棄てきれない。

ごはんだよと母親の声で呼ばれたような気がするのでベッドから起き上がる。

最後の項目は一旦忘れることにしよう。今は先の三つのほうを考えるほうが先だ。

青春って難しい。

○

夏休みまで残り僅かとなっていた。

夏休み前最後の土曜日。

最初にやることにしたのが、第三項目『バイトをする』だ。これから長期休暇に突入するのだから、この機会を逃すわけにはいけない。ただ、バイトをしたことがない俺にはどんなバイトが一番青春している感じなのかよく分からない。高校生のバイトのイメージがコンビニの店員くらいしか思いつかない。

朝起きて時計を確認したら一〇時で、心地のいい風が窓から入ってくる良い朝で、おそくにおはよう、略しておそようであり、リビングのテーブルには『行ってきます』とだけ書かれた母親からの書き置きが残されていただけだった。

朝食を適当に取ろうと思ってキッチンを見たが、何もない。朝食を抜いても人間死にはしないが、どうも昨晚頭を使いすぎたせいか、妙に腹が減っていた。それに、また考え事をしなくてはいけないのだから、エネルギーは必要だ。だけど、何もないければ、何も食えない。

どうしたものか。

調理をするにしても食材もないし、そもそも俺の調理スキルは目玉焼き程度だ。

幸い外はまだ涼しいようだし、今のうちに近くのコンビニにでも行くか。

俺は半袖Tシャツ、ジーンズに着替えた。上下黒という暑い暑いと言っておきながら夏にやたら挑戦的なスタイルである。まるで全身カラスのようだ。ちなみにスニーカーも黒という徹底ぶりだ。

外は部屋で感じたものより一層良い風が吹いていた。だが、近づいてくる暑さもなんとなく感じられた。あれだ、雨が降る前にその匂いがするようなものだ。違うかな。ここ最近、天気は晴れ続きだ。俺の気持ちは何も晴れないというのに。まるで自分だけがこの世界で場違いな存在なんじゃないかという気がした。

場違い男は、コンビニに向かい始めた。

歩いていると、若々しい小学生男子や女子たちがわいわいと遊ん

でいるところに出くわした。若いなー、と思えてしまうところが既に重症なのかしれない。俺もあれくらいの歳に戻りたいものだ。そうすれば、まだこんな墮落した青春時代を迎えないでよかったし、必死になって考えずに済むのに。

俺の横を走って通り過ぎていくボーイズ&ガールズ。

俺は歩くのを再開した。

ぐずぐず言っていたって、どうしようもないのだ。必要なのは、変えようとする努力であり、実際に変えなくては変わらない。

坂道を下る。下った先に、一つのコンビニがある。そこが終着点だ。

ゆっくり、ペースを変えずに歩いていると、ポケットで振動を感じた。三回ほどパターン化された振動が鳴り終わると、振動は止んだ。

ポケットの中から携帯を取り出すと、待ち受け画面を確認する。

唯一の友人からのメールだ。

友人『今何してるー？』

これだけだ。これ、週末恒例メールである。

俺『今からコンビニ向かうところ』

友人『お前……先週も同じこと書いてたぞ』

返信早いな、相変わらず。……あー、確かに先週も行ったな。

俺『パンを買いに行くんだ。別に暇だからって行くわけではない。勘違いするんじゃないぞ』

友人『そんなこと誰も聞いてないぞwww』

明らかにそう思っていただろう。

俺『そういうお前は何してるんだ？』

友人『彼女と一緒にいる』

こいつ、朝っぱらからあの可愛い彼女と一緒にいちゃいちゃしてんのか。羨ましい限りである。むしろそこまで露骨だと恨めしく思えてくる。まあ、あいつだからこそ許せるわけだが。

友人は俺の目標というか憧れというか、そんな感じだ。あいつは

俺が知る中では一番青春というものを充実させている人間だ。尊敬できる部分も多い。あいつから声をかけられたときはすごく驚いたし、同時に嬉しかった。あれから一年が経つ。あいつは日々進化していくけど、俺は進歩がない。

俺『青春って何だろうな』

学校一の青春マスターに聞いてみた。昨日聞こうと思っていて、結局面と向かっては聞けなかったのだ。それを聞いてしまったら、己を変えようとする気持ちが始えてしまうのではという心配が心の片隅にあった。

返ってきた解答は意外で、ほっとした。

友人『僕にも分からないな』

なんだ、同じじゃないか。

メールのやり取りを終えるころには、コンビニの前に着いていた。坂道の先にあるコンビニ。駐車場は田舎だけに無駄に広い気がする。トラック一台と軽自動車一台だけが駐車してあるだけ。大変無駄だ。外から軽く眺めたところ、時間帯的に朝のピークと昼のピークの間であったためか、店内には女性が二人、おっさん一人がいるように見える。なんとという過疎コンビニ。

ドアをくぐる手前で、外よりも涼しい空気が外に流れてきた。

中に入ると、とりあえず第一目的のパンコーナーに足を運んだ。

最近の菓子パンはいろんなものがあるんだなー、と思ったり。

適当に惣菜パンを手に取り、次に店の奥にある大型冷蔵庫から飲み物を選んでいた。

「関原？」

後ろから呼ばれたような気がする。

振り返った。

そこには店内に唯一の女性が立っていた。顔に見覚えあるような気がする。いや、見たところおそらく自分と同じくらいの歳だろうから学校で見たことがあるように思えたのかもしれないけど、確かに俺の苗字は関原だし、案外同じクラスなのかもしれない。

高校生になって同い年っぽい女子に話しかけられることなんて初めてのことだから、結構ときどきした。

自分だけ心拍数高くしているなんて情けない。

実際それは仕方のないことだと思う。俺の目の前に立っている女子は非常に美人だ。今までその存在を知らなかったのを悔やんでしまっただけである。

ここで疑問なのは、何故俺に声をかけたのか、ということだ。

「関原じゃないの？」

「……関原だけど、あんたはだあれ？」

模範解答。いや、模範質問？

「あなたの隣のクラスの藤橋だけど」

藤橋。聞いたことがない名前だけど、おそらく同じ学校で同学年なのだろう。それが分かった瞬間、さらに気恥ずかしくなってきた。なるべく目を合わせないようにする。

「その藤橋さんが俺に何の用？」

「ん？ いや、別に用はないんだけど。この間職員室で怒鳴られてたでしょ？」

……そんなことで名前を覚えられたのか。『気恥ずかしい』から『本気で恥ずかしい』に進化した。顔を真っ赤にしていなかったら、か。本当に恥ずかしくてその場で蹲りたい気持ちで一杯になって、実際うずくまってしまうようになったが、そこをグッと堪えてなるべく気持ちを顔に出さないようにする。

初対面の女子と初めて話した内容が自分の羞恥話というのは、一体誰が考えた罰なのだろうか。

○

「これは何なんだ？」

この世界がマンガの中だったら、先生のおでこには怒りマークが浮かんでいたことだろう。

「進路調査票ですけど、それが何か？」

「どうして進路が書かれていないんだ？」

「まだ決まってないからです」

顔が引きつっていることがこっちから丸分かりだ。明らかに怒ってらっしゃる。

「だからって白紙で出しているいいわけがないだろ」

「ちゃんと書いてあるじゃないですか。ほら、ここに」

「こんなもん進路じゃねえ！」

少々怒りっぽい先生は俺の進路調査票を机に叩きつけた。その衝撃で机に置かれていたものは横に傾き、隣に座っていた先生も驚いて椅子から転げ落ちそうになる。ドスの効いた声は教員室だけじゃなくて、廊下のほうまで響いてるんだろいうなという推測。明らかに迷惑だった。

「まあまあ落ち着いてください先生。周りの先生方も驚いてますから」

「誰のせいだと思ってんだあ、関原」

「いきなり怒鳴った先生が悪いです」

「真面目に書かねえてめーが悪いんだろうが！」

再び今度は握り拳を作って机を殴った。さすがに二回目をやるとは思ってもいなかったので驚いてしまった。この調子だと次は机じゃなくて自分が殴られかねないので少し先生から離れた。ちなみに隣に座っていた先生はとくに教員室外にお逃げになられていた。

正直俺もここから立ち去りたい気持ちで一杯だ。

すっかり口の悪い男性教師っぽいイメージが定着しているところ悪いのだが、先生は真正正銘の口の悪いスカートを穿いた女性教師である。皆からは美人でカッコイイ（黙っていれば）と最高に慕われている藤橋先生である。

実年齢より若いお姉さんって感じに見えるのに、本当に残念な人だ。

「聞こえてんぞオラア」

気付かないうちに独り言を声に出してしまっただけ。今度気を付けることにしよう。

先生の剣幕がより一層鋭くなるのが釣りあがった目を見ただけで分かった。あー、怖い怖い。まるで街中で地元不良に絡まれたみたいだ。レーザー光線のような目線の対処法が顔を背けるしか見つからない。

「いい加減にしろよ。お前と遊んでるほど私は暇じゃねーんだ」

「奇遇ですね俺も暇じゃないんです。帰ってもいいですか？」

「まずはこの紙を黒くしてから帰れ」

「黒く塗り潰しますよ？」

「文章を書け……ってお前とコントしてる場合でもねーんだよ！」

おお、ノリツツコミ。

「ほんとに頼むよ……。まだ提出してないの、お前だけなんだよ。

何だよ、この『青春がしたい』って。お前今十分に青春してるじゃねーか」

俺の進路調査票の第一志望には『青春がしたい』の文字が書かれていた。いや、実際には俺が書いた。

正直何も思いつかなかったというのが本音だ。別にやりたいこともないし、なりたい職業もない。このままニート一直線な思考の持ち主である。

「してませんよ、全然」

していないから、そう書くのだ。していたら、そうは書かないさ。

「先生は、俺くらいの歳の頃は青春してましたか？」

「そもそも青春ってするものなのか？」

……確かに。

言われてみれば、そんな気もしてくる。

「じゃあ、どんな高校生活を送ったんですか？」

「ばりばり部活してたさ。これでもスポーツ少女だったんだぜ」

「ガツカリです。てっきりレディースだったものかと」

「表出ろやオラァー！」

先生は椅子から勢いよく立ち上がる。俺は本気殴られるんじゃないかと身体を縮ませた。

こえーよ、めっちゃくちゃこえーよ。

絶対に地元不良よりも数倍怖いだろ。レディースだったと言われとも違和感まったくない。っていうか、高校教師って生徒に体罰していいんだっけ？ よく他の先生がいる前でこんなに怒鳴れるよな。教員室にはあと二人くらいしか教員はいない。生徒に怒鳴る先生を止めようとする勇気ある教員は誰もいなかった。誰か助けろよ。

殴る気も萎えてしまったのか、先生は深い溜め息を吐くと椅子に座った。

肘を机に突きながら、もうどうでもいいような感じで俺に言った。

「お前さー、何かやりたいことないわけ？」

「ないから見つけたいんです」

「部活動に入らず、委員会にも入らず。暇なやつだな」

「今見つけるのに忙しいんですよ」

主に頭が。身体はほとんど動かしていない。

「あのさ」

「何でしょう」

「お前さっきから青春青春ってバカの一つ覚えみたいに連呼してるけどよ」

ここまで生徒をバカにする教師と俺は未だかつて会ったことがない。

「お前にとって青春って何なんだ？」

思考が止まった。

あれ？ 青春って何だろう？

友達と楽しい時間を過ごすことか？ 趣味を満喫することなのか？

？ バイトして働くことなのか？ それとも、とにかく生活を充実させることなのか？

どれもそんなような気がするけど、どれも違うような気がする。それに結局それらは手段であり、それが青春というわけではない。考えても考えても見当たらない。

ニヤニヤしながら見つめる先生は嫌らしく笑う。先ほどの怒りから一転、言葉が詰まってしまった俺が大変愉快に見えるのだろう。それが僕にはとても不愉快だった。あんたのせいで頭の中ぐちゃぐちゃだよ。せっかく決意して頑張ろうとしていたのによ。先生は第一志望をご丁寧に消しゴムで消して、俺に差し出した。「お前には特別に夏休み全部を使って進路を悩む権利を与えよう。悩むならとことん悩め、少年」

○

「姉さんから聞いたの」

「お姉さんから？」

どうやって俺が怒鳴られたことを知ったのかを聞いてみた。その答えがこれだ。

姉と一緒に学校に通っているのか。

だけど、おかしいな。

あの教員室には俺以外に生徒はいなかったはずだ。廊下の端まで響いただろう先生の怒鳴り声を聞いたのかもしれないが、そもそもその怒鳴り声の中に俺に関する情報は確か無かったはずで、まとめると「あんたのお姉さんはどうやって俺が怒鳴られていたことを知ったの？」ということである。教員室への出入室時に姿でも見られたのだろうか。

「お姉さんはどこで俺を見たの？」

「何言ってるの？」

俺もあんたが言っていることがさっぱり分からんよ。

彼女と俺はドリンクコーナーから三歩くらい移動して、マンガ雑誌を並んで立ち読みをしている。お互い目線は雑誌に向いていて、

会話をしている感があまりない。ページとページとが擦れる音がいつもより大きく聞こえるように感じる。

「一緒の学校に通ってるんだよね、俺たち」

「そうよ」

「お姉さんも同じ学校に通ってるんだよね」

「まあ、そうとも言うわね」

「お姉さんから俺の話を聞いたんだろ？」

「さっきそう言ったじゃない」

話が見えてこない。

……そうとも言う？

「あのさ」

「何よ」

「お姉さんって生徒だよね」

「姉さんは教師よ」

……あーあーあーあー、なるほどね。

ようやく分かった。

「お姉さんは俺のことなんか言ってた？」

「うちのクラスに阿呆な関原が一人いるんだけどな」

「その時点で俺だよ、クラスには関原は一人だけだからな」

「青春したいとかほざくの。『バカじゃねーの？』って言ってやっ
たよ」

「言われてねーよ。それ以上に重い言葉の暴力に撲殺されたよ」

あのととき平気な顔しておいて実は傷ついていたり。

「私が核心突く質問をズバッと聞いたときのあのきよどった顔、今
思い出しただけで笑えるわ（笑）」

「もう教師として最低だな」

「私に言われても困るわ」

「まったくその通りだ」

そう、彼女の姉というのは、俺の先生で、僕を怒鳴った張本人である。あの人見た目から口軽そうだからおそらく暇つぶしにでも俺のことを喋ったのだろう。

そういえば彼女が名乗った苗字は藤橋で、先生は藤橋で、……気付かない俺はやっぱり阿呆だった。ていうか、先生こちら辺に住んでたのね。

そう言われてみれば、確かに彼女と先生は血が繋がっているだけあって顔の特徴が似ている気がする。先生をもう少し幼くした感じだ。目からあの威圧感を感じることはない。幼いといっても、俺よりも大人びて見える。

「で、その藤橋さんはなんで俺に声かけたの？」

「たまたま見かけたから。姉さんの話を聞いて話しかけたくなくなったから」

「それはそれは、予想を遥かに超えてつまらない男ですみません」

「いいいえ、予想以上に興味深い方でとても嬉しいです」

「それは奇遇ですね。実は僕も今日あなたに会えたことは運命なんじゃないかと思ってるところでした。偶然の奇跡ですね」

「私は必然だと思っています」

ここまでの会話で目を合わせた回数零回。

倦怠期の夫婦でももっと目線を合わせるだろうに、今さっき知り合ったばかりの俺たちは目を合わせず他愛のない言葉遊びに興じていた。彼女の眺めている雑誌を横目で見ると、ちょうど自分が読んでいるマンガのページだった。それからずっとページを捲らずにそのままの状態。

外はすっかり暑そうだ。帰りたくなくなるな。

「どう思う？」

彼女からの質問である。いきなりで戸惑った。

「何を？」

何を聞いているのか、なんとなく分かるけど一応聞いてみた。

「このマンガ」

学園物で今人気のマンガの、ちょうど主人公とヒロインが話している場面だった。

ようやく目をこちらに向けてきて、左手は雑誌を持ち、右手はそのページを指差す。その指先にちょうどヒロインの胸部があるのは何かの意図があるのだろうか。ないほうが気まずくならず済むくらいいいんだけどさ。いや、もしかしたらそのことについて聞いているのかもしれない。……いや、ないと思うけどさ。

「これがどうしたわけ？」

「これのどこが面白いと思う？」

すぐに答えようかと思ったけどすぐに言葉が詰まってしまった。考えてみれば、どこが面白いのだろう。確かこのマンガの単行本を持ってたはずだ。結構この雑誌の中でもお気に入りなもの、だけど改めてどこが面白いのかと聞かれると具体的に思いつかない。

何かが面白かったはずだけど、どこだっけ。

「戦闘シーンの疾走感」と適当に答えてみたけど、実際は別に疾走感の欠片もない高校生同士の殴り合いがたまに描かれているだけだ。バトル物と表現するほどバトルは繰り広げてない。むしろ登場人物たちが駄弁していることが多い。

「コントみたいな作られた会話というものだと思っていたわ」

「それじゃあ今の俺たちが面白いつて言ってるようなものじゃないか」

ハハハハ、二人して笑った。

「青春したいって何？」

唐突な切り口に感嘆符が絶えない俺の頭の中。あの暴力（今のところ言葉限定）教師は人の悩みも言いふらすしたのか。だが、今はあの最悪教師への怒りよりも同年の女の子に自分の悩みを聞かれたという恥ずかしさのほうが数段勝っていた。

逃げるように答えた。

「動詞ですな」

「その解答じゃあ最高でも△ね。○はあげられないわ」

「満点よりも赤点ギリギリを狙う派だからね」

「真面目に答えなさい」

結構真面目な顔をしていた。真面目に聞いているのか。

やりにくいな。ただでさえ相手は女子なのによ。

「なんでそんなに気になるんだ？ 男子高校生の悩み事なんて女子高生が気にするようなことじゃないだろ？」

「気になるから。それ以上に理由が必要なの？」

「……ないな」

否定しても言葉攻めにされそうである。さっきからの言葉遣いからみて、言葉力のほうも姉妹で似ているような気がするな。いや、むしろ妹のほうが口喧嘩が強そうだ。姉のほうは勢いでゴリ押しされるからな。

「青春がしたいんだよ」

「何がしたいわけ？」

話が続かねーなー。というより、続ける気がないだろ。

「だから青春を」

「青春って括りが大まか過ぎない？」

自分で分かっていることを人に言われるのは予想以上に辛いことだ。

このまま少しずつ追い詰められていくのは、目に見えて分かる。直球投げ込まれてそれを真正面から受け止められるほど、俺は強い人間ではない。この場合は、逃げ続けるしかない。

「何が青春に含まれるのかも分からないだよ、俺は。だから、その質問には答えられないな」

「それでは青春することもできないわね。残念ね」

「ご期待に添えなくてすまないね」

「部活とかはしないわけ？ 十二分に青春っぽいわよ？」

「二年で何も取り柄もない人間を入れてくれるような部活があると思うか？」

「生徒会に入るとか。意外に青春っぽいじゃない」

「大変面倒だな。考えるだけで嫌になる」

「そんなこと言ってたら何もできないじゃない」

「実際何もできない人間なんだよ」

「口だけは達者なようね」

「ハハハ、そういう君も口は達者ではないか」

「お揃いね、フフフ」

……不覚にも少しドキッてしてしまった。

単純だな、俺って。

「あなたって何かしたいことないの？」

「これといってないな」

「暇人ね」

「そういう藤橋さんは休日にコンビニにいるほど暇なんじゃないんですか？」

「そうね、私も暇人ね」

「肯定するんだ」

「事実を言っただけだよ」

「さっきから俺のことばかり聞いてくるけどさ。藤橋さんは部活に入っていないわけ？」

「あなたと違って私は部活動に勤しんでるけど」

枕詞のように俺を比較に使わないでほしい。

「休日に部活とかないわけ？」

「うちの文芸部は本を読むことが主な活動だから大会あるわけじゃないし、休日に部活動する必要はないの。実際のところ、あなたと特に変わりないわ」

「所属しているだけマシだろ。後輩だっているんだろ？」

「いるし、慕ってくれてるのだろうけど、これといって面白味はないわ。だからあなたと特に変わりないわ」

「友達だっているだろ。自慢じゃないが、俺は一人しか友達がいない」

「本当に自慢できることじゃないわ。零だったらまだ格好がついた

のに」

こっちが質問してるのに追い詰められている。

顔色一つ変えずに雑誌を読んでいる

「友達ね。あなたの数倍はいるわ。だけど、特別仲が良いわけではないし、休日出かけるような仲でもないし、ただ学校で生活する上で暇にならないため、かな。だから、あなたと特に変わりないわ」

「さっきから俺と特に変わらないって言ってるけどさ。俺と明らかに違うだろ」

「いいえ、変わりないわ。私だって青春してないもの」

「したいって思わないわけ？」

「一年生のころはしたいと思ってたかもしれない。けど、もう二年の夏よ。やるには遅いわ」

「青春に遅い早いがあるのか」

「あるんじゃない？」

分からなくもないけど。

「スタートから間違ったらどうしようもないと思わない？」

「スタートって高校入学のことか？」

「あの時点でどこの部活に入るか、どういう人と仲良くなるかによってだいぶ違ってたと思わない？」

「それはよく分からないな。結局自分が変わらなくちゃ結果は同じじゃないか？」

過程はどうあれ、結果は同じ。

「確かにそういう考えもあるわね」

「そろそろ会話の内容が難しくなってきたて、話すのも大変なんだが」「そうね、私もさすがに口が疲れてきたわ」

雑誌を閉じると、元の位置に戻した。

彼女は携帯で時間を確認した。店内の時計を見ればいいのになんて口が裂けても言わない。

「私はこの辺で失礼するわ」

微笑みながら「またね」と言いながら手を振る。

あつさりとコンビニを後にしていった。

彼女の帰る姿を目で追って、彼女の姿が見えなくなったとき、ようやく今日コンビニに来た理由を思い出した。朝食を買いに来たのに、時計を確認したらもう12時だ。朝食どころか昼食だ。

俺はパンを戻したあとに、弁当の選別を始めた。

またね、か。

彼女と話すの、楽しかったな。

あれ？　そういえば、彼女が聞いたのは俺が怒鳴られた話であつて、いくら俺の名前を知っているからって、俺の顔を知っているはずがない。

どうやって、俺だと分かったんだ？

○

夏休みが間近だからって、平日には当然学校に行かなくてはいけないわけで。夏休み気分の気持ちも気落ちしそうになるほどの期末試験の答案が俺の元に返ってくる。こっちに来るなといっても近づいてくるのだから、現実として受け入れなくてはいけない。受け入れてしまえば、結構気が楽になった。

試験のことが気にならなくなると何故か藤橋のことが脳裏に浮かんだ。

実はここ最近はいつの間にか彼女のことばかりを考えていた。

これはあれなのでは！？　とも考えたが、考えるだけ虚しいのですぐに捨て去った。

この前知り合ったんだし、学校で声を掛けてくれるんじゃないかと淡い期待を持っていたものの、結局そんなことはなかった。俺を訪ねてくる人なんて、友人だけだ。

お手洗いから教室へ戻る途中に隣の教室を覗くと、確かに彼女はいた。席に座っている彼女の周りには友人らしき女子生徒が立っていた。仲良さそうに話している。どこが俺と変わらないというんだ。

これで青春していないというのは贅沢なのではと思ってしまった。
そして、味気なく夏休み前最後の日が終わった。

次の日、夏休み初日、早速行動に出ることにした。

バイト探しである。彼女という存在のせいで頭の中でその存在が霞んでいたため、夏休み前からやっておこうと思っていたのにできなかったのだ。

やることは明確なはずなのに、それが実行に移せない自分にイラついてしまいそうだった。

バイト探しをどうやってすればいいのかよく分からなかったため、とりあえずコンビニに置いてあるだろう求人情報誌を貰いに行くことにした。藤橋がいればいいなと少し期待しながら、家を出た。

外に出るということ自体が失敗だったのかもしれない。

案の定、藤橋はいた。

この前のように雑誌を読んでいた。何を読んでいるのかと思ったら、これまたマンガ雑誌だった。

いたらいたで話しかけられない自分はやはり意気地無しだった。

特に話すこともないし、彼女が見られただけいいことにしておいて、さっさと求人雑誌を貰って帰ろうと思っていた。

……求人情報誌、雑誌置き場の近くにあるし。

しばらく待っても帰りそうもない。

「あら、久しぶりというほど久しぶりじゃないわね」

「三日振りくらいじゃないかな」

「今日は何の用？」

まるでここが自分の家のような口調だな。しかも今日は藤橋に用はないし。

俺は雑誌置き場に隣接してある無料情報誌置き場から一部抜き取った。

「今日はこれに用があるんだ」

「ニートが働こうとしても無駄だと思うよ？」

「ニートじゃねーし！ 学校通ってますし！」

「夏休み限定ニート」

本当になりそうで怖いからやめてほしいな。

「そうならないためにこうしてバイトを探してるんだけど」

「だけど、特にやりたいことがないんでしょ？　なら、どんなバイトを選んでも絶対、確実に失敗するに違いないわ。断言してあげるからありがたく思いなさい」

「そんな心配いらんわ！　しかもなんで貶められてる俺のほうが感謝しないといけないの！？」

「今日はテンション高いのね。やりにくいわ」

「そっちもやたら突っかかってくるな。さっきまであんなに心配していた自分がバカだった！」

「何を心配していたの？」

「……話す気はない！」

「それより、騙したな！」

「大きな声出ささないでくれない？」

「変わらないって言うっておきながら、結構充実した学校生活送ってるじゃないか。俺とは数倍違うよ」

「あれがあなたには羨ましく見えたわけ？」

「……少し見えた」

そうだよ、友達多くて羨ましいなとか少し思っちゃったよ。それのどこが悪いというんだ。

と言おうと口開ける前に、彼女の右手が俺のまさに目の前で人差し指を立てていた。その予想外の行動に俺は口を詰まらせてしまった。

「いえ、予想外にあなたが器の小さい男で失望したの」

「……俺に何の期待をしているんだよ、君は」

「友達百人作るとか？」

「今の百倍！？」

「ハーレムとか？」

「数が多けりゃいいってわけじゃないんだからな！」

器の大きな男の基準が絶対におかしい。ていうか、藤橋が俺にそんな期待をしていたというのが驚きだし、ある意味悲しい。まるで俺が誰にも構われなくて寂しいみたいじゃないか。……確かに寂しいけどさ。

おそらくさつきから喋っていることは冗談だろうけど。

彼女は雑誌を戻すと俺のほうを見て、

「あなたの青春ってその程度なの？」

こんなことを言い放ちやがりましたよこのお嬢さん。もうお兄さん、その言葉に驚きすぎて目玉が飛び出るかと思ったよ、ハハハ。言葉のキャッチボールで大暴投、デットボールだね。いきなり勢いのある球を投げないでほしいな。

いくらなんでも君にそこまで言われる筋合いはねーよ。俺の青春なんだから、別にどうだっていいじゃないか。君は別に関係ないだろう？

自分で言い聞かせるように脳が三十回転くらいさせたけど、予想以上に言葉が重くて引つかかる。

青春が未だに何か分からない。

分からないから、程度とか大ききとか、よく分からない。

それをその程度呼ばわりされている。

……どう反応すればいいんだ？

怒ればいいのか？

「とりあえず、バカヤロー」

「どうして棒読みなの」

「とりあえず、言ってみた」

「とりあえず、そのとりあえずを付けるのをやめなさい」

「その程度と言われてもなー。俺には『その程度』が低いのかも分からないんだよ。高すぎるようには感じないけどさ、ちょうどいい感じがする。それくらいなら青春してるって感じられないか？」

「少なからずそんな青春の持ち主である私はしてるという実感が湧かないわね」

ふーん、そんなものなのか。

やっぱりよく分からないな。

蝉の声はガラスを突き抜けて、夏の日差しもガラスを突き抜けて、隣のお嬢さんからは言葉攻めを食らい、まるで自分以外のもの全てが敵のような気がしてきた。

「じゃあさ、そういうこと言う君は夏休みにしたいこと、なんかないの？」

ふふふ、と彼女はニヤケ笑顔を浮かべた。大変素敵なお顔だった。まるでおもちゃを買い与えられた子供のような、とても楽しいそんな笑顔だ。嘘です、とても意地悪そうないやらしい笑顔でした。だけど、その笑顔も素敵に見えるのだからまた不思議だ。それだけ彼女が魅力的な容姿をしているということなのだろう。

そのまま店外へ行ってしまった。

解答に困ったから逃げられたのか、それともあえて教えずに立ち去ったのか。

僕には、やっぱり何も、分からなかった。

○

夏休みだというのに、学校に呼び出しを食らった。

『ただでさえ暑さでダルイというのに、何故夏休み中に学校になど行かなくてはいけないのだ』

的なことを電話越しの相手に言って抗議したものの、『さっさと来い』と恐ろしくドスの利いた女性の声が聞こえた気がしたので素直に行くことにした。弱肉強食の世界に生きている以上、仕方がないことなのだ。世の中に逆らっては生きていけぬ。悲しきことよのお。

学校には部活動にこの暑さ以上に熱く活動している体育会系生徒

がうじゃうじゃといた。なんとも青春指数が高い空間なのでしょう、グラウンドという平地は。野球帽を被ったおそらく一年生が走りこみをさせられている。俺の横を通っていく。汗がキラキラと輝いて見えるよ、ほんと。

健康的で、それでいて活発的な彼らとは対照的に俺はだらだらと前へ進むので精一杯だった。

彼らのように強くないのでさっさと建物の中に入ります。

騒がしかった校庭とは打って変わり、校舎内は閑散としていた。軽音部のギターの音、吹奏楽部の管楽器の音が遠くから微かに響いてくる。そういえば休みの日に学校に来るなんて、初めてのことだ。部活動やってないんだから当たり前なんだけどね。

「ちわーっす」

階段を上がって、すぐのところに教員室がある我が校。なんて来校者に優しい設計。さっそくドアを開けて、挨拶をしながら入室した。教員室内はクーラー絶賛稼働中。大変過ごしやすそうな環境だった。どうやら勉学を教える教師が率先してエコ活動に着手するつもりはこの学校ではないらしい。

「失礼しますだろうがバカヤロー」

口の悪さでお察ししていただけると思うが、我がクラスの担任、藤橋先生である。口の悪さでは我が校イチである。

「挨拶が奇抜ですね。出会い頭「バカヤロー」と生徒に言う教師はあなたが初めてかもしれませんね」

「お前の初めてをもらえてうれしいよ」

「語弊があるんで、教員室でそういうことを言うのやめてください」「教員室じゃなかったらいいの？」

「いいわけあるかセクハラ教師」

他の先生方の目線が痛い。何故か先生よりも俺のほうに集中してるし。

対する目の前の悪魔に似た先生は恐ろしくも美しい顔で微笑んでいた。この性悪女。

「さっさと呼んだ用件を話してください」

「まあ、いいじゃないかゆっくりとしていけよ」

「こんな教員室にゆっくりしていききたい生徒なんて一人もいません」
ただでさえ居にくい雰囲気を作られた上、俺はさっさと家に帰りたいのだ。

やることだってなくはない。

しかもこれ以上この人と会話をしたら、どんどん他の先生方の俺への評価がガタ落ちどころか急降下である。

「そんなに私と話すのが嫌か？」

「好きか嫌いかと聞かれて悩んだ挙句嫌いではないと答えるくらいには」

「やだー、好きだなんて」

「実は鼓膜破れたんじゃねーの？」

「膜はとつくに破れてる」

「ふざんけんなよ最低教師」

帰るどころか、他校に編入したくなってきた。

「くだらないことばかり言っているとマジで帰りますよ」

「最近どうなんだ？」

……どうやら、本題に入っただけらしい。

改めて、やっぱりこの人と藤橋が姉妹なんだな、と感じた。冗談交じりの会話の中で相手の言葉を打ち切ってまで自分の話に持っていくこうとするあたりが特に。

「どうなんだと言いますと？」

「青春は見つかったか？」

「残念ながら見つかってません」

「そうなのか？ てっきり見つかったものだと思っていた」

「何を根拠に」

「バイト探してるそうじゃないか」

「妹さんから聞いたんですか？」

「あいつ、よくお前の話をしてくれるからな。最近よく会うらしい」

な」

「必ずといってコンビニ店内ですけどね。それよりも先生の家が俺の家の近くにあるだなんて知りませんでした」

「そうか？ お前が幼稚園児くらいの頃にいろいろちよっかいだした覚えがあるんだけどな」

「……マジですか？」

素で驚いている俺を見るのが楽しいのか笑顔はより一層良くなっていく。

「マジもマジ、大マジだとも。昔はあんなに可愛らしい子供だったというのに、なんでこんな生意気になってしまったんだ。『おねーちゃん』って呼んでたんだぞ、私を」

「おそらくそれは俺のドッペルゲンガーです」

知りたくもないことを知ってしまった。

なんでも俺が小学生になる前に一回引越したらしく、藤橋妹が高校に入学するときにこの町に戻ってきたらしい。そして先生はこの学校の教師となった。

ということは、藤橋妹とともに昔の知り合いということになる。俺は姉妹をすっかり忘れていたみたいだけど。

そして一つの疑問もようやく解消された。どうして俺のことを知っていたのかと疑問に思っていたが、藤橋妹が俺のことを覚えていれば知っているのも当然である。自慢ではないが、容姿的に幼少期からあまり変わっていないと肉親から何度も言われたことがある。

藤橋妹は俺が分かっていて、何故か隣の教室の住人とだけしか言わなかった。

昔の知り合いだと名乗らなかった。

相手が覚えているのにこちらが覚えていないというのは案外きついものだ。昔話をされても分からないのでは相手に悪い気がする。妹からはまだされたことはないけど。

「私に似て美人に育っただろ」

「先生に似て口喧嘩が強くなりましたね」

「なんと私は普通の喧嘩も強いぞ」

聞いてねーし、見た感じで分かるし。というか教師が喧嘩が強いと豪語するのはどうかと思う。

先生は俺に呆れているのか、それとも自分の発言に物耽っているのか、大きな溜め息を吐いた。

「それにしても、バイトとは浅はかな考えだな。もっとやりたいこと見つからなかったのか？」

明らか俺に呆れていた。

「残念ながらそのバイトもやりたいことではないんですよねー、これが。どちらかというと、やらなくてはいけないことかもしれないかもしれません」

「じゃあまだ夏休み前と変わらないわけか。つまり男だなお前」

「短期間に変われるほど俺はできた人間じゃありませんよ」

「せっかくの夏休みだというのに彼女の一人もいないのか」

「二人もいたら問題でしょう」

「誰か好きな人とかいないわけ？」

なんで俺は教師と友達同士みたいな会話をしてるんだ？

好きな人ね……。

ある人物が脳裏に浮かび上がった。一瞬で浮かんだその顔を否定したくなった。いや、なんとなくだけどね。

「叶わぬ恋するほど俺は暇ではありません」

「恋といったら青春の代名詞だろ」

「その分成就する可能性が少ない」

だから、俺は切り捨てたのだ。やるべきこと項目を考えたあの日の夜、考えた次の瞬間には捨てていた。それは、時間がかかるし、実らない可能性もある。

「努力次第だろ」

「努力して実らなかったときのことを考えるとそんな博打はできません。俺は臆病ですから」

「お前高校生らしくないな。青春時代を通り越して大人になったみ

たいだ」

「現実味のあるただの高校生ですよ。恋だって別にしたくないわけじゃないんですよ。だけど、今は青春するための近道を探しているだけです」

「じゃありアリストになりかけのただのバカだな」

きっぱりと言った。出会い頭の『バカヤロー』よりもこの『バカ』のほうが明らかに重く、心に突き刺さる言葉だった。のは間違いない。

現実主義者か……むしろ自分では理想主義者だと思っていたから、まさかそんなことを言われるとはまったく思っていなかったな。しかも『なりかけ』ときたか。そういう言われればそうだな。理想を掲げて何かをしようと思っているものの、現実を見て戸惑っているのは俺自身だ。バイトだってさっさと決めてもし気に食わなければ違うバイトをまた探せばいいのにその一步を踏み切れていない。近道を見つけるといえるのは、逃げるための言い訳だったのかもしれない。

俺は理想主義者でも、現実主義者でも、高校生としても、なりかけだった。

こんなときによく奥底に置かれていたものを思い出した。

そうだ、確かに幼少期の俺は先生に会っている。何回も遊ばれた気がする。藤橋妹は、その隣で笑っていた気がする。俺も笑っていた気がする。

「私はお前の教師である前に、お前の姉だ」

先生は言った。

「もっとはちゃめちゃしてもいいんじゃないか？ 一生に一度の人生だぞ？ 今やらずに何が青春なんだ？ やりたいことから逃げてどうするんだ？」

「自分のやりたいことをやりなさい」

まるで実の姉に言われたような感じだった。

○

「最近よく会うね」

「たまに神の意図的なものを感じるよ」

「神様も余程暇なんでしょうね」

もちろん俺と彼女はコンビニにいた。例のごとく雑誌置き場にて。蝉は相変わらず五月蠅い。よくあんな声が出せるものだ。声を出すことに飽きないのだろうか。

最近は彼女と会うのがほぼ日課になりつつある。結構嬉しいことだったり。

「昨日は学校に行ったらしいね」

「……さっそく君の姉は話したのね」

「すっごく楽しそうに話していたわ」

あの性悪教師め、覚えてろよ……。

「全部聞いたの？」

「全部ってどこからどこなのかしら？」

……こっちもこっちで厄介だな、おい。

「いいよもう」

雑誌を開くとちょうどこの前彼女から意見を求められた作品だった。

主人公が口が切れて血を流しながらも友人を他校の不良共から助けてるシーンだった。現実だったらこんなこと絶対にありえない。こんなもの青春とは言えない。……まあ、もしかしたら日本のどこかではこんな青春があるのかもしれない。だけど、少なからず俺はこんな青春願ひ下げである。

「このマンガってさ、有り得ない青春だから面白いんじゃない？」

「私には分からないわ」

「それでもいいんじゃない？」

分かってても分からなくても、青春は人それぞれなのだ。

部活に全てを尽くす高校生もいれば、友人のように恋に生きる高校生もいるのだ。

ならば俺は何なのか？

おそらく青春を考える高校生なのだ。青春を考える青春。

今のところはそれでいい。そのうち違う青春が生まれるかもしれない。

なんでも彼女、昨日バイトの面接を受けて見事受かったらしい。

いつの間に、という驚いたのと、先を越されたというのがなんとなくショックだった。俺も早く見つけなくては。今後の資金源のために。

「藤橋いもうとー」

「なーあーにー」

「今度夏祭りにでも行こう」

無茶苦茶をやるのも、たまにはいい。

Q:「青春って何ですか？」 A:「……愛、かな？」

「あたしのこと、好き？」

話の脈絡を完全無視、断ち切るように質問してきた彼女を僕は見た。

あまりに予想外だったのですぐ答えるつもりが言葉が詰まってしまった。

彼女は誰から見ても愛らしく可愛らしい顔立ちをしている。特に頬を軽く膨らませる仕草がたまらなく愛らしかった。ちなみにここで言う「彼女」というのは、英訳で「she」ではなく、「girlfriend」のほうである。もっと詳しく言うと、僕と彼女は男女交際している、ということである。

「好きだよ。君が僕を好きなくらい」

「うん、さすがあたしの彼氏くんだ」

彼女は素敵な笑顔で言った。

どうやら彼女が思う理想的な模範解答だったらしい。それはよかったと僕は内心ほっとしている。愛してくるくらいことは言おうかと思ったけど、気恥ずかしくなってやめたのだ。

だけどあんな答えていいだなんて、付き合い始めて結構な月日が経っているはずなのに未だ彼女のことがよく分からないな。なんて何回も考えてしまう。そんな僕は彼氏の資格はあるのだろうか？ 彼女さん検定なんてあったら合格できるかも不安である。

「ここで『好きを通り越して愛してる』だなんて言ったら一発殴ってました」

「……殴られるのは嫌だな」

内心言わなくてよかったと思ってます。

だって見かけによらず痛いんだもの、彼女のパンチ。

一回冗談で殴られたことがあるけど、冗談と思えないほど痛かったのを身体がよく覚えている。軽く鳩尾に入って吐きかけた。その

後、彼女に背中を擦られた覚えがある。

「ちなみにあたしは君のことが大大好きなのです」

「……それは愛してるとどれくらいの差があるというの？」

「愛してるは好きの二倍で、大大好きは好きの三倍なのです」

「そうかー」

お互いどれくらい好きなんだろうね。

高校二年の夏休みが始まったばかりだ。

高校二年の春は意外にもあっさり終わってしまい、気がついてみたら、もう夏休みに突入していた。その間何をやっていたのかという、ほとんど彼女と一緒に過ごしていた気がする。休みの日も平日の放課後も。まったくもうラブラブだね。

「そうだねー、もうラブラブ過ぎて嫉妬の嵐だねー」

「そーだねー」

解答に迷ったので逃げることにした。

蝉が忙しくなく鳴いている。「まるで僕たちをひやかしてるみたいだね」とクサイ台詞を吐こうかと迷ったけど、結局言うのをやめた。言った自分はおそらく恥ずかしいだろうし、蝉は結局うるさいままだし。

それもこれも彼女が可愛いのが悪いのだと彼女の容姿のせいすることにした。彼女の容姿が反則なのだ。そうやって逃げる自分はなんて醜いことか。

僕たちは畳の上で寝転がっていた。

朝早くから彼女は僕の家を訪ねてきて、今までこうしていた。

ほどよい暑さが窓から入ってくる。

ヒンヤリとした畳をべったりと引っ付いていた。すだれの合間からは夏の日差しが差し込んでいた。

横には彼女が笑顔で横たわって僕を見てくる。

「あついねー」

「だねー」

僕たちは一丁前にバカップルをしているのだろうか？

他人から見たらそう見えるのだろうか。ほかにバカップルを見たことがないから分らないな。

試しにバカップルっぽい質問を試してみることにした。

「僕のどこが好き？」

……言ってる自分が恥ずかしくなるだけだった。

「意外にカッコイイところ優しいところ興味深いところ」

意外にが余計だったけど、よくも恥ずかしそうな素振りもせずになんか言えるよな。……最後のは好きのうちに入るのだろうか？

「じゃあ今度は反対に、あたしのどこが好き？」

「可愛いところ愛らしいところ僕に興味を持ってくれたこと」

誰であろうとも、興味を持たれたということが何よりも嬉しかった。

では、彼女が僕に興味を持つ前に、他の誰かが僕に興味を持ったら、僕がその人を好きになったのだろうか。もし彼女が僕に対する興味を失ってしまったら、僕を好きではなくなるのだろうか。僕に対する興味を無くした彼女を僕は今のように好きでいられるのだろうか。

分からない。

実際にそうなると思うと怖い。ココロにポツカリと穴が開いてしまっただけだ。

僕がそんなことを考えているとも知らず、目の前の彼女は笑顔を絶やさない。たまに僕、その笑顔を見るのがツライときがあるんだ。君はそれに気付いてるかな。分からないな、何もかも分からない。だからお互い興味深いし、飽きないのかもしれないね。

「今日はどうしようか？」

僕は彼女に聞いてみた。

「今日は暇を楽しむことにしよう、そうしよう」

また難しい提案をしてくる。

暇を楽しむ、か。何もせず、ただこうやって畳の上で寝るだけの時間。そういうのもいいかもしれない。何かをしたほうが絶対に良

いとは言えないのだから。

夏休みという彼女と過ごせる時間はまだ始まったばかりなのだから、焦らなくてもいい。

それに、別にこうして彼女と一緒にいるだけでいいのだから。

「今年の夏祭りはどうしようか、僕の彼女さん」

「今年こそは浴衣を着て君をハアハアさせたいと思ってるの、あたしの彼氏くん」

「今の君にも僕は胸がドキドキだよ」

「やったー、キャハハ」

僕の彼女さんは大変嬉しそうな顔をした。

僕もそれが嬉しくて、お返しに笑顔を浮かべたつもりだけど、君にちゃんと送れたかなキャハハ。

その後も僕たちは畳の上で今年の夏の過ごし方を計画していた。

○

※ここからは僕の記憶であり、事実と若干のズレが生じている可能性があります。

当たり前のことだが、生まれてからずっとこうして二人でイチヤイチヤしているわけではない。

家が隣で物心のつく前からの幼馴染でお互い相思相愛であつたらそう言えるかもしれない。

僕と彼女の関係ができる前に、そこまでに至る出会いというのがある。

そんな大それたことではないけど、それでも彼女との出会いは僕にとっては大変なことだ。今でも彼女が初めて僕に声をかけてくれた日のことを覚えていたりする。すぐに記念日を作りたいがるカップルみたいに、僕だけその日を記念日のように大事にしている。

僕が変わった日でもあるのだから。

その日に彼女にそのことを話したら「よく覚えてたねー、さすがはあたしの彼氏くん」だけで話が終わってしまった。軽くあしらわれてしまった。彼女は覚えているのだろうか、もしかしたら忘れてしまったのかもしれない。こればかりは彼女の頭の中を覗かない限り、解明することができそうにない。彼女はそういうことを表に出そうとしないからな。

あの笑顔の裏で本当はどんなことを考えているのだろうか。

謎は深まっていき、深すぎて底が見えない。

もしかしたら表も裏もないのかもしれない。

あれが彼女なのかもしれない。

……だいぶ話がズレてしまった。

閑話休題。

本題に戻ろう。

彼女とのファーストコンタクトのことである。

一年前、入学して一ヶ月経った春の日。桜の花びらは全て落ち、特に春という実感も湧かない頃に彼女は僕の前に現れた。……いや、同じクラスだっただけだね。まったく自慢ではないが、僕は人付き合いが得意ではない。ただでさえ不慣れな新しい環境だというのに、苦勞して作り上げた中学校の頃の人間関係は高校生活には生かせなかった。今のクラスに知り合いは誰もいなかったからだ。当然彼女とは一言も言葉を交わしたことがなかった。

そんな僕は教室で一人、自分の席に座ってコンビニのパンを頬張っていた。

誰かしら一人くらいは僕と同じような境遇の人間もいるだろうと高を括っていたのだが、周りを見渡す限りそんな人間僕しかいないことが一目瞭然。皆が楽しそうに喋りながら昼食を取っていた。……なんか自分だけ孤立しているのが恥ずかしくなってきた。さっさとこの空間から出たくなってきた。まるでクラス内の声がこの空間の異物である僕を排除しようとしているかのように感じた。こんな

ところ僕から願ひ下げだ。こんなところずっといたら精神的にやられてしまいそうだ。

先ほどよりもパンを口に運ぶペースと囃むスピードを速める。

僕は携帯をポケットから取り出した。僕が通っているこの学校は学校敷地内での携帯の使用を禁止していない。結構そういうところは緩いのだ。バイトも学校の成績に支障来さない程度なら許可されている。校風が自由なのだ。

携帯画面で眺めながら食を進めている。

「どーもー」

現在携帯電話で通話してません。

「おーい、聞こえてるのかなー」

おかしいな、女の子に声を掛けられるようなことをした覚えもない。もしかしたらこうして毎日一人でいるうちに人恋しさゲージがK点を越えて女の子の声の幻聴が聞こえるようになったのかもしれない。

そんな都合の良い耳がほしいなーと思ったけど、そんなことはなかった。

声がした方向を見た。

ちょうど僕から見て左に、彼女は立っていた。

「なんで君は一人にいるのかなー？」

黒髪ショートの彼女は、僕の周りの真っ暗空気を払い去るような明るい声で尋ねてきた。

整った顔立ち、高校生というよりは中学生っぽい容姿と背をしている。僕よりも数十センチ小さい。

同じクラスだったはずだ。確か名前は……。

「名前はどうでもいいわ。今は何故君が一人にいるのかが大事ですよ」

「それは僕にとっては大事じゃない」

……どうして僕の心の声が聞こえたんだよ。読心術者？ それとも僕はいつの間にか思ったことを口に出していたのだろうか。

「君にとって大事じゃなくても、あたしにとっては結構重要なのです」

「どこらへんが？ 別に僕と知り合いってわけじゃないし」

「君が教室内で一人真っ暗オーラを垂れ流しにしながらお昼ごはんを食べていると、どうしてもそんな君が視界に入っちゃうあたしとしては大いに迷惑なのです。楽しい楽しいお昼タイムが台無しです」

あー、そういうことか。

確かにこの空間の中で一人だけ仲間外れがいるだけで迷惑だよな。僕が彼女の立場だったとしてもそう思うもの。イジメとは違う。僕のほうから彼女らを遠ざけているのだ。彼女の言う真っ暗のオーラで身を固めて、この空間に押し潰されないように、壁のようなものを作って。

「分かった。出ていけばいいんだろ」

僕は席を立って教室を出るために歩き出そうとした。

その言葉に彼女は首を傾げた。

「どうして君が出て行く必要があるの？」

僕は第一歩目で足を止めた。

そして彼女の顔を見た。

本当に不思議そうな表情を浮かべていた。僅かながら首を横に倒している。まるで僕が言ったこと、行っている行動の意味を分かっているようだった。いや、おそらく分かってない。

もしかして彼女は帰国子女で日本語の意味をよく分かっているのかもしれない。

この春にアメリカから日本に帰国して、この学校に入学。そして僕との運命の出会い……。

いや、そもそも今まさにそのファーストコンタクトなわけだし、彼女流暢な日本語喋ってるし、なにそのギャルゲーみたいな展開期待してんの自分……、と三段階に渡って心の中で自分にツツコミ。

僕は言った。

「だって、僕がいたら気分が悪いだろ？ なら、いない方がいいじ

やないか」

「それは一人でいることが見苦しいからです」

……さっきから失礼じゃないか、この女子？

「だから、それは出て行けばいい話だろ？」

「その必要はありません」

彼女は胸を張って言った。さっきから彼女との会話がまったくかみ合っていないように思えるのは僕だけだろうか。残念ながら、彼女の言っていることが僕にはさっぱり分からない。もしかしたら本当に帰国子女？

彼女は僕に向かってこう言った。

「私と一緒にお昼ごはんを食べましょう。そうすれば万事解決です」

「……………」

はっ、驚きすぎて呆然としてしまったぜ！

えーっと、彼女はいったいなんて言ったんだ？

僕の耳が間違っていないければ、どうやら『一緒にお昼ごはんを食べませんか？』とお誘いを受けたみたいだけど。どうやら今日は耳の調子がよろしくないらしいな！。

いや、例えそう彼女が言ったとしても、何故？

何故、僕なんかを誘うんだ？

だって、彼女と僕は今回初めて会話したんだぞ？

それに男子から誘われるならまだしも、女子から誘われたなんて現実世界で有り得ないことだろ。もしかして昔会ったことがあるのかもと考えたけど、そんな覚えもない。

何故？

僕が一人で見ているのが見苦しいのは分かるけど、そんな自分を生贄に捧げるようなやり方はどうかと思うな。

「何気に自分を蔑んでるよね、君は」

「だから勝手に地の文を読むんじゃない！」

「地の文？」

いえ、こっちの話です。

「それにね、僕は一人でいるほうが好きなんだ」

見栄を張った嘘を吐いた。

別に僕は、一人でこうしているのが好きなわけではない。嫌いでもない。一人でいるほうが楽なときはある。誰かといったほうが楽しいときもある。

「それはイケナイことだなー。人は一人では生きていけないんだよ？」

そんなことあなたに言われなくても重々分かってます。

ここで僕は周りからの目線が集中しているのに気付いた。

周りを見渡すと、クラスの皆は箸を持つ手を止めて、顔を揃えてこちらを向いていた。

彼女との会話に集中するあまり、周りの視線をあまり意識していなかったけど、意識してしまうと凄く緊張する。というより、この空気が嫌だ。恥ずかしくなってきた。目立つつもりはなかったのに、クラス中に晒されてしまった。そう考えると、すぐにでもこの空間から逃げ出したい。

僕は怒鳴るように言った。

「どうしてそう君は僕に構うんだ！！」

先ほどまで僅かに聞こえていた生徒の声まで止まってしまった。

完全に空間は静まり返った。

止まった世界。視線の真ん中には僕がいた。

たった数分前にはこうなるとは思ってもしなかった。

周りからの視線という圧力に耐え切れなくなった僕は思わず怒鳴ってしまった。

言い終えた瞬間、僕は言ったことを後悔した。顔は青くなり、頭の中は白くなっていく。

僕は明らかな拒否を示した。女子に逆切れに近い声で怒鳴って。

そんな人間、最低だ。自分でも分かっている。だけど、ここで彼女を提案をそのまま呑み込むことがどうしてもできなかった。なんで彼女が僕に話しかけてきたのかが分からない限り、僕はその誘いに頷けなかった。

これで明日から僕はこのクラスの中で完全な孤独の存在になる。

それでも別にいい。どうせ前とあまり変わらない。

これで僕の青春は終わったと、そう思っていた。

そもそも青春なんて言葉、何も意識などしてなかった。このまま誰とも特別仲良くなるわけでもなく、ただ普通の高校生活を送っていく。それでいいと思っていた。

だけど、彼女は笑顔で言った。

「君に興味があるから構うんです。これでいいですか？」

再び沈黙が訪れた。

今度は僕が固まった。

具体的には思考と身体が固まった。

『彼女、今なんて言った？』本日パート2である。氷のように段々と融けていくように、思考も段々働いてく。僕は彼女の顔を見た。まだ素敵な笑顔のままだった。

どうしてだ？

どうして、あんな拒否反応を示したにも関わらず。

周りの人間を見ると、僕並に呆然とした顔をしていた。先ほどまで彼女と一緒に昼食を食べていた友達らしき女子生徒は箸でつまんでいたミートボールを白米の上に落とすほどである。僕もその女子生徒の立場だったら同じリアクションを取っていたかもしれない。

未だに理解しきれていなかった。

なんですか？ 新手の愛の告白ですかそれは？

頭の中が混乱している僕の他所に、彼女は自分のお弁当を僕の席に移動させていた。

「さあ、早く食べないと昼休みなくなっちゃうよ」

その一言で皆はこの状況に戸惑いながらも我を取り戻して箸を進め始めた。空間が再び動き始める。生徒たちの会話。物音。先ほどの静けさが嘘のようだった。

そして未だに停止しているのは僕だけになった。

まだこの状況と彼女の発言を完全に理解することができないまま突っ立っていた。

「そうそう、さっきの数学なんだけどさ」

まるで最初から一緒に昼食を取っていたかのように会話を振ってくる。

「ほらほら座って」

彼女は僕の机を平手で叩いて僕の着席を促した。

彼女の言うとおり、とりあえず自分の席に座った。

「普段から売店のパンなの？」

「……ああ」

「へー、なんかオススメのパンとかある？」

「……メロンパンとか」

「私メロンパン好きなんだー。今度一緒に買いにいこー」

ほんの数秒前に怒鳴った相手とどうしてこんな日常的な会話をしているのだろう。

もはや突き放す気力も僕には残っていなかった。

この後も的外れな日常会話を繰り返すのだけど、それは省略。

とにかくまあ、僕と彼女はある意味衝撃的な出会いをして、今の関係があるわけです。

彼女がよく分からないこと、そしてそこがまた魅力的だということ、そしてそんな彼女に僕が興味を持った意味がよく分かってもらえたことだろう。

彼女の行動、言動、想像は普通の人のそれとは少しズレている。未だに彼女が分からない。

次は僕と彼女が正式にお付き合いすることになった出来事、つまり愛の告白である。

先ほどの彼女の台詞はもうほぼ告白に近かったし、その後もまるで付き合ってるみたい二人でいる時間が増えたりしたのだけど、実質付き合い始めたのは今から約一年前の夏休みからだ。

なんで付き合ってもいないのに休み時間によく話したり、昼食と一緒に食べたり、一緒に家まで下校していたのかというと、それは彼女の勢いに流されたというのが一番の理由だろう。彼女の押しに押されまくって、結局一緒にいたような気がする。ときどき僕が拒否反応を示しても、それもあっさり無視されてしまった。

そんな微妙な関係が二ヶ月ほど続いていた。これは苦痛の二ヶ月と言ってもいい。

心の中では「あれ？実はこいつ、僕に好意があるんじゃない？」とか調子付いたことを勝手に思っていたけど、実際彼女はそんな素振りも見せず、ただ二人でいるというのがなんともつらい。「いつそのこと僕から告白しようか！」と思ったこともしばしばあったが、彼女の顔を見るとそんな思いも吹き飛ぶほど緊張している自分がいた。さてさて話を戻しまして、一年前の夏休み。

場所は、近所の図書館。告白した日の前にもその図書館には二人でたびたび訪れており、よく二人で勉強を教えあっていた。主に教えてもらっていたけど……。

その日も夏休みが始まったばかりだというのに、二人して夏休みの課題に取り組んでいた。

図書館のテーブルの上に課題のノート、テキスト、プリントや文房具を広げていた。テーブルを挟んで、向かいに彼女は座っていた。僕のシャーペンがいつまでも仕事をしないうちに、彼女のノートはどんどん黒くなっていく。

「なんで僕は夏休み始まったばかりだというのにこんなところで課

題なんてやっているのだろうか」

「そこに課題があるからじゃないかな？」

「登山家と一緒にしないでほしいな。学生の本分は遊びだよ」

「いえ、学習です」

「夏休みだけは例外です」

そこはどうか例外であってほしい。

夏休み前半に宿題を終わらせる生徒など、この日本にいったい何人いるのだろうか。

一応目の前に一人いるけど。

「最初にやっておいたほうがあとが楽で楽しいでしょ？」

「僕は好きな食べ物は先に食べるタイプなんだよ」

「好き嫌いが激しそうだよね」

「だいたい課題の量がおかしいんだよ。多すぎる」

「そうかな、そうでもないよ」

この会話の最中でも、彼女は手を休めない。

目の前の人みたいな生徒だけに別の課題を出せばいいんじゃないかな、先生。

「休憩しないか？」

「始めてまだ一時間も経ってないんだけど？」

「飽きた。つまんない。嫌だ」

「なにその三拍子」

「課題に取り組む生徒の代表である僕の心の声」

「心の声前面押し出しだね」

この場合、彼女への押し売りだな。

しょうがないだろう、課題に取り組む集中力は残念ながら持ち合わせていないのだ。

そんな僕を見る彼女の目もどこか残念なものを見る目をしているように見えた。……新鮮でいいね！

「……なんか今変なこと考えなかったかな？」

僕に若干引いてるように見える彼女。

そうか、彼女は心の声が聞こえるのか。そんな設定すっかり忘れたいた。

では、今ここで卑猥な言葉を連呼すれば彼女は聞こえるのだろうか。もし聞こえるのなら数秒後には顔を赤らめた彼女を見れるかもしれない。やばい、見たくなってきた。そんな顔今まで一度も見ることがないし、赤らめた顔はどれだけ可愛いのだろう。

再び彼女を見ると、突き刺すような視線を僕に送っていた。明らかに軽蔑している。

僕が考えることなどお見通しというわけか。

このまま連呼したら、彼女とテーブル以上に間が開いてしまうどころか、亀裂が走ってしまうかもしれないので今回はやめておくことにした。

「今回はってどういうこと!？」

「おおー、通じた。マジでエスパーなんじゃない？」

「話を逸らすんじゃない! 重要なのはそこじゃない!」

「いや、そこでしょ。もしかしたらエスパーかもしれないんだよ?」

「そんなことどうでもええんじゃない!」

彼女がキレた。初めて見た。

「おおー、キレたキレた」

「なんでそんなに嬉しそうな顔をしてるの!？」

「また違う一面が見れて僕は嬉しいです。ありがとうございます」

「ど、どういたしまして……じゃないわー!」

「まあ落ち着いて」

「誰のせいだと思っているんじゃない!」

「逆ギレしないでくれないかな?」

「えっなに? あたしがいけないの?」

「いや、間違いなく僕のせいだな」

「コノヤロー!!」

「図書館では静かに」

「なにもかもおまえのせいじゃー!!」

これ以上言ったらさらなる一面を見れそうな気がするけど、後戻りできそうもないのでからかうのはやめることにした。

赤面顔は見れなかったけど彼女なりに頑張ったキレ顔が見れたのでよしとしよう。

すこし息を荒げている彼女。ある意味赤面である。

彼女をいじるのに満足した僕の手はようやく課題のプリントに向いた。英文を和訳しろという命令文が書かれたプリント。見ただけでやる気が萎えてしまった。シャーペンを手放す。

そもそもなんで今日僕は課題をしなくちゃいけないのだ。

明らかに彼女のせいである。

というか、なんで僕は夏休みに入ったというのに彼女と一緒にいるのだろうか。

ようやく呼吸の落ち着いた彼女に僕は質問した。

「なんで僕は夏休みだというのにこう毎日のように君と会っているんだ？」

それを聞いた彼女は、即答した。

「それはあたしと君がお友達だからだよ」

「お友達だからって毎日とは会わないだろ」

今日のこの集まりもちょうど寝起きに電話が掛かってきて、「一緒に勉強しない？」と誘われたのだ。呼び出されたらまるで犬のように従う僕も僕なのだが。だって、可愛い同級生が誘ってくれているのだから、断る理由も無いだろ。むしろ断るわけにはいかない。

彼女に悪い虫が付いたら大変じゃないか！

……ここで勉強しているのは、明らかに僕の自業自得だった。

いや、彼女が僕を誘うのが悪いのだ。

男女で二人きりの勉強に誘う方が絶対におかしいのだ。確かに「一緒に勉強しない？」と言われたとき二人きちなんじやないかとか考えてドキドキしていたけど、大抵こういう展開だと他に人がいるのがアニメやマンガでの定番である。

まさか本当に二人きりだとは思わないだろ？ 最初に誘われたと

きは驚いたものだ。だって本当に二人だけだったんだもの。

「まったくどんな関係だよ」と心の中で言った。

「じゃああたしたちの関係って何なんだろうね」

彼女から聞かれてしまった。こちらから先に聞こうと思っていたのに、先に聞かれてしまった。

ずっと前から一つだけ思い浮かんでたけど、それは一蹴。それを想像する前に頭の中から掻き消した。だってさ、そう思っているのが僕だけだったら気まずいじゃないか。

脳味噌をフルに活用して答えを導き出す。

「お友達じゃないかな」

「それさっきあたしが言った。そして君はそれを否定した」

その通りだった。だってそれ以外思いつかないじゃん。

「じゃあ僕には分からないな」

一蹴して掻き消したはずの考え、もとい妄想が「あれ？もしかして自分なんじゃね？」と出しゃばってきた。

「そうならいいな」と思ってしまい、だけど「それはないだろう」と否定する。

頭の中で葛藤している僕。彼女は質問してきた。

「じゃあ、どんな関係がいいの？」

明らかに僕に何かを言わせたいような、そんな雰囲気を出している彼女の笑顔をしていた。彼女は分かっているのだ、僕が考えたことが。もう完全エスパーですね。怖い怖い。しかも彼女、分かっているにも関わらず僕の口から言わせようとするし。

頭の中の葛藤は関が原の戦いのように二分化していた。

なんとなくこの空気で言うべき台詞は分かっている。

言うべきか言わないべきか、そもそも彼女は僕にその台詞を言わせてどうしたいのだろうか。

最高の展開と最悪の展開が同時に脳裏に浮かんだ。

「どうなのかなー？」

追い詰めるかように、解答を迫ってくる彼女の顔はやけに楽しそ

うだった。

僕はヤケクソになって言った。

「彼氏彼女の関係かな！」

静かな図書館内に僕の声がよく響く。もう無駄によく響く。雑誌読んでた中年おっさんも、絵本を物色してた小学低学年くらいの子どもも、課題図書を探しているらしい中学生も、皆がこちらを目を丸くして見ている。

テンパって若干裏返った声を発した僕はすぐさま顔を真っ赤にした。……たぶん。

とにかく、顔が火照っているのは確かだった。本音を言うとうごく恥ずかしい。もう穴でもあったら入りたいくらい、ていうか彼女の前から消えていなくなりたいくらいに恥ずかしい。

対して、告白された側の彼女の顔は赤くなんてなっていない。それどころか、どこか満足げな顔をしていた。僕にそれを言わせたのがそんなに嬉しかったのか。

そして彼女はすぐに返答してくれた。

「そうかそうかい、なら男女交際したほうがいいよね、うん。私は全然オツケーだよ！」

と語尾に保しマークが付きそうな感じで親指を立てながら僕に言った。今日一番の笑顔だった。そのときの彼女の顔が忘れられない。輝かしくて微笑ましい笑顔だった。

僕なんかより遥かに男らしかった。

なんでだろう、告白してOKもらったはずなのに、哀しくなってきた。

彼女は右手を差し出して、

「ということで初めてのあたしの彼氏くん、これからよろしく、

かな？」

「……これからも末永くよろしく願います、僕の彼女さん」
こうして晴れて僕と彼女は彼氏彼女の関係になりましたとき。
めでたしめでたし。

○

※ここからは記憶ではなく、今現在です。

そしてそのさらに約一年後。

夏休みに入る前、最後の土曜日。朝っぱらから僕は彼女と一緒にいた。もうあれから毎日こんな感じである。時間があれば二人でいることが付き合う前以上に増えた。

今日は駅前のコーヒーショップで夏休みの計画を立てていた。

二人の前には二つのコーヒーカップが置かれている。

「海行きたいよねー、海。夏と言えば海だよ」

「そうだね、行きたいね」

このまま行きたいところを上げていたらきりがなさそうだ。

どこに行きたいのかは彼女に任せることにして、僕は携帯を取り出した。一年生の秋に出来た友人に毎週恒例の報告メールを送る。

学校で毎日会ってるんだけどね。

僕『今何してるー？』

友人『今からコンビニ向かうところ』

またか。

僕『お前……先週も同じこと書いてたぞ』

友人『パンを買いに行くんだ。別に暇だからって行くわけではない。勘違いするんじゃないぞ』

何故そんな言い訳めいたことを言っているんだろう。かえって「あれ？実はこいつ、違うことをしてんじゃないか？」って考えちゃうじゃないか。

僕『そんなこと誰も聞いてないぞwww』

友人『そういうお前は何してるんだ？』

何って……。周りを見渡した。ここはコーヒーストップで、僕の目の前にはコーヒークップを唇に当てて、傾けている彼女がいる。

僕『彼女と一緒にいる』

友人『羨ましいことだ。羨ましすぎて呪い殺すかもしれん』

中学生の頃にはこんなメールのやり取りを友人とすることになるとは思ってもいなかった。

僕は彼女を見つめた。彼女は僕の視線に気付いたのか、頭上にハテナマークが浮かびそうな表情をして首を横に傾けた。

ここでふと、二つの疑問が頭に浮かんた。

彼女は僕のどこに惹かれたのだろう。僕は彼女のどこに惹かれたのだろう。

彼女は僕の何かに興味を持って、僕に声を掛けた。僕は拒否をしたのに彼女は僕に近づいた。そして僕が告白した日、彼女は二つ返事で付き合おうと言った。僕はいつの間にか彼女と一緒にいることに馴れていた。彼女と一緒にいるうちにどんどん彼女のことが分かるどころか分からなくなっていき、僕は彼女に知りたいと思い始めていた。

僕が返信する前に友人からメールが来た。

友人『青春って何だろうな』

どうして我が友人はいきなりこんなことを言っているんだ？

夏の暑さのせいで頭でも狂ったのだろうか。

あいつの青春なんて考え付かないな。

青春、ね……。

僕の青春は何なのだろう。

今このときがそれなんだろう。過ごした中学生生活、今過ごしている高校生活、そしてそのうち過ごすことになるだろう大学生生活。今までの高校生活で、僕は今までに何をしてきたのか。

今までの高校生活、僕の隣には必ずといって彼女がいた。今も隣

にいる。

もしかしたら彼女が僕の青春なのかもしれない。

彼女が好きな僕が青春なのかもしれない。

どっちなんだろうね。

僕には彼女が分からないし、彼女が僕をどこまで知っているのかも知らないし。

それなら青春もまだ分からないな。友人は僕のことを青春マスターだなんて大それた呼び名でたまに呼ぶけど、そんなことはない。

僕『僕にも分からないな』

どっちにしろ彼女が中心にいるのは間違いない。

彼女がいることで、今の僕があるのだから。

「あのさ」

「何かな？」

「ついこの間一年生の女の子からラブレター貰ったんだけど、どうすればいいと思う？」

「というか一昨日である。」

一年生の結構可愛い女の子に体育館の裏で手渡しというなんとも古風なやり方で手紙を貰った。二年生の常識とも言われている僕と彼女の関係は、新一年生まではあまり浸透していかないらしい。僕が彼女と付き合っているということも知らなかったらしい。僕は「手紙はうれしいけど、今付き合っている人がいるから君とは付き合えない。ごめんね」と丁重にお断りしたのだ。

断ったんだけど、なんとなく彼女に聞きたくなったのだ。

「君の好きにしまえー少年」

「……断れとか言わないんだね」

「君の青春だもの。あたしは止めないよ」

……彼女が分からないなー。

「普通彼女なら止めるでしょ……」

「あたしは彼氏くんを信じてますから」

彼女は笑って言った。

「信じてくれて僕はほんとーにうれしいよ僕の彼女さん」

「やったー、彼女さんもううれしいよ！」

両手を挙げてバンザイする彼女はコーヒーショップで明らかに浮いていた。

だけど、彼女のそういうところが魅力的なのかもしれない。

○

夏休みが始まって既に二週間が経過していた。

最近やけに寝起きが悪かった。

そりゃ夏だし、暑くて寝苦しいかもしれないが、それにしても気分が優れない。

風邪でも引いてしまったのだろうか。

だるい気もする。

とにかく不愉快だった。

自室内に置いてある時計は午前十一時を示していた。

単なる寝すぎだろうか。

とにかく起き上がって顔でも洗おうと思い、自室を出た。

洗面所の鏡に映る自分の顔があまりにも酷かった。

眼球は充血していて、髪は豪快に乱れて、明らかに疲れを表している顔全体。

どうしてこうなったか。

僕はそれを知っていた。ただ現実逃避を決め込んでいたのだ。

だけど、いつまでも現実逃避して現実が変わるわけでもない。

最後に彼女と会ったのは夏休みが始まったばかりで僕の家に来たとき。

あれ以来彼女の顔を見ていない。

毎日のように顔を合わしていた彼女ともう数日も会っていない。

何故か携帯に電話をかけても、繋がらない。

生活のバランスは完璧に歪んで曲がって大崩壊。

最後に会った日に届いたメールにはこう書かれていた。

「夏祭りでまた会おう、あたしの彼氏くん」

夏祭りは明日。

さて、彼女さんはどこいったのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4838n/>

セッション？

2010年10月25日01時10分発行